

谷川彰英著『地名に学ぶー身近な歴史をみつめる授業ー』  
(黎明書房, 昭和59年)

横 山 十四男

( 1 )

この本は、235頁を一気に読み通させる魅力を持った、社会科教育の実践・研究書である。

気鋭の社会科教育理論派である著者谷川氏が、「自己の進むべき道をどのように取るべきかを必死に模索」<sup>(1)</sup>しつつ、「つまずき苦しむなかで」<sup>(2)</sup>学生・児童・一般社会人と文字通り一体となって造り上げられた授業実践が、解りやすく記されているからである。

そこには、「今日の教育現場は活力を欠いている。私の研究はこのような体制への挑戦なのである」<sup>(3)</sup>という烈帛の気魄も吐露されているし、また、柳田国男の民俗学と歴史教育論に対する造詣と、「社会科の初志を貫く会」の学習過程論、授業方法論とを結合させることによって、独自の社会科教育論を打ち立てようとの壮大な意欲も感じられるのである。

( 2 )

内容構成を紹介してみると

序 章 なぜ地名を取り上げるか

第1章 地名と日本の教育

- ・地名とは何か
- ・近代教育と地名

第2章 地名教育の実践的探究

「木下」……・地名教育研究の出発

・「木下」の授業

・反省点

「新宿」……・新宿のイメージ

・新宿はなぜ新宿なのか

「日本橋」……・子どもの江戸意識

・日本橋と魚河岸

・「佃島物語」

「世田谷」……・世田谷にもお城があった

・「上」と「下」の地名

第3章 地名教育の意義

- ・歴史教育の変革
- ・地名の教材性
- ・「授業文化」論

第4章 地名に学ぶ社会科授業の構想

以上の通りである。

まず序説で、地名学習の意義として次の3点が挙げられている。①地名はわが国の歴史を物語る重要な文化遺産である。②地名を学習することはまず文句なく楽しい。そして授業で学ぶ内容を自己の生活とのかゝわりで捉えることが出来やすい。したがって、③沈滞しきっている現在のわが国の教育界に新しい風を送り込み、少しでも活力を呼び起こそうとする際の、一つの有効な方法となりうる、と。

そして第1章で、柳田国男、吉田東伍、鏡味完二、山口恵一郎の地名分類の研究史を紹介したあと、明治以降の地理教育が結局その本質からずれて、地名アレルギーを招来してしまったと指摘する。

第2章が本書の本体で、ここに著者の地名教育についての4つの実践事例が紹介されていて、大きな迫力となっている。

そしてまた第4章には、池田昭氏(元成城学園初等学校)、竹下昌之氏(成城学園初等学校)、有田和正氏(筑波大学附属小学校)、高石哲己氏(市原市立姉崎中学校)の、それぞれの地名教育もしくは、地名を利用した授業の実践事例概要が収められている。

### (3)

私はこれらのうち、「世田谷」の授業実践を参観したことがある。その際最も驚嘆・敬服したのは、学生諸君がイキイキと作業に取組んで、紙芝居を作成し、その紙芝居の出来ばえが実にすばらしかったということである。勿論授業自体も質の高いすぐれたものであったのだが、この授業の実践研究が成功した理由は、どうやら谷川彰英氏個人の熱意と指導力に負うところ大であって「地名教育」そのものの本質に起因するとは限らないのではないか、というのが卒直な感想であった。

本書を通読してみてもこの感想は変らなかった。

著者は「はしがき」の中で「社会科の教材として地名は素晴らしい価値をもっている」とし、第3章では、更に分野を限定して、特に歴史教育活性化の救世主のような位置づけを持っていると主張されるのであるが、その点は果していかゞなものであろうか。いくつかある中の有効な一つであることには違いないが、最も重要な位置づけを与えることには疑問が残る。

児童・生徒にとって身近かで生活と密着し、主体的に取組める歴史教材内容としてまず第一に挙がるのは、①わが家の歴史 — 父母や祖父母の生活史を調べること、家系図を作成すること — であり、ついでには②自分の村・町の歴史 — 社寺や石仏・石碑の由来、年中諸行事の由来と始源、事件にまつわる伝承、および地名の由来 — ということになるのであって、地名学習はOne of

them にすぎないと思うのだが、いかがなものだろうか。

現行学習指導要領でも、民俗学研究成果を利用することをすすめているが、事物の始源説話や年中行事の由来よりも、地名学習の方がすぐれているとするならば、その理由がもっと親切に説明されていてもよいのではないか。

最後にもう一つ。歴史学研究者の間で、最近盛行の“社会史派”の研究動向に対して、それは身近の雑事の研究で、趣味・考証の域を出ないではないか、との厳しい批判<sup>(4)</sup>が出されているがそれと同質の批判が「地名教育」にも向けられた場合、著者はどうお答えになるだろうか。

#### 注

(1) 228頁           (2) 228頁           (3) 189頁

(4) 例えば佐々木潤之介「“社会史”と社会史について」(『歴史学研究』№520  
1983年9月号 所収)

(筑波大学教育学系)